保育所の食事場面における保育者の子どもへの言葉かけの特徴に関する研究

A Study on The Characteristics of Caregivers′ Verbal Communication to Children During Mealtime in Nursery Schools

佐々木　郁　子＊　　　吉　川　はる奈＊＊
SASAKI Ikuko　　　YOSHIKAWA Haruna

【概要】本研究では、保育所の食事場面における保育者の子どもへの言葉かけの特徴を明らかにしようとした。具体的には、参与観察により、８つのエピソードから発話の表現（音声言語表現）、意図、子どもの年齢の観点から保育者の子どもへの言葉かけを分類した。その結果、発話の表現は12のカテゴリーに分類され、意図は９のカテゴリーに分類された。さらに、得られたカテゴリーを用いて、発話の表現（音声言語表現）と意図の関係について調べた。その結果、食事場面における保育者の子どもへの言葉かけでは、保育者の意図を集団食事場面という場面を利用したり、子どもの発達段階を考慮した音声言語表現を用いたりしているという特徴が明らかになった。

【キーワード】食事場面、保育者、言葉かけ、保育所

Abstract：This study focused on the expertise of caregivers to improve the quality of childcare and tried to identify the characteristics of caregivers' verbal expressions to children in the mealtime scene in nursery schools. Specifically, we categorized caregivers' verbal commands to children in terms of speech expression, intention and children's age. The results showed that speech expressions were classified into 12 categories and intentions into 9 categories. Furthermore, the relationship between speech expressions and intentions was investigated using the categories obtained. The results revealed that caregivers' verbal communication to children in eating situations were characterized by the use of group eating situations and the use of speech expressions that took into account the children's developmental stage.

１．研究の背景

我が国では、共働き世帯の増加、低年齢児保育需要の拡大、待機児童の増加、保育所不足等の問題から、保育の量的拡充に関する取り組みが行われている一方で、「保育の質」に対する関心も高まっている。「保育の質」については秋田（2009, 2012）も指摘のように「社会や文化の価値に基づく相対的・多元的な概念を含むものであり、何をもって「質」とするのか、政治・経済・社会・文化すべての次元を含むため、単純に定義することは難しい」とされる。このように「保育の質」に一義的な定義を与えることは困難であるが、経済協力開発機構（OECD, 2006）は世界各国の先行研究で取り上げられている内容を整理し、「保育の質」の諸側面を「志向性の質」「構造の質」「教育と概念と実践」「相互作用あるいはプロセスの質」「実施運営の質」「子どもの成果の質あるいはパフォーマンスの質」の６つの要素から生態学的に捉えている。これら６つの要素間の関係は明示されていないが、野澤（2018）はOECD（2006）による「保育の質の諸側面」とほぼ同一の内容の６つの要素について、それらの関係を「保育の質の多層的システムモデル」によって構造化している。それによると、「保育の質」の中心には、「成果の質」（OECDによる保育の質の諸側面における「子どもの成果の質あるいはパフォーマンスの質」に対応する要素）と、「プロセスの質」（同じく「相互作用あるいはプロセスの質」に対応する要素）があることがわかる。このことは、「保育の質」の向上には、「子どもの成果の質あるいはパフォーマンスの質」および「相互作用あるいはプロセスの質」の向上が必要であることを示唆している。特に、「相互作用あるいはプロセスの質」のうち、保育者から子どもへの作用（働きかけ）は、保育者の専門性に直接関わる内容である。

一方、保育において、保育者の専門性が問われる場面として食事場面があげられる。食行動には、食欲を充足させる、生命維持、健康維持といった生理的側面と、食文化という言葉が示すように文化的・社会的側面がある。保育所における食事場面の中でも、生理的側面および文化的・社会的側面の双方から教育されるという特徴があり、保育者には保育所の特性を活かすこと

＊　埼玉大学教育学研究科修士課程
＊＊　埼玉大学教育学部生活創造講座

が求められる。一方で、伊藤（2013）によれば、保育所の食事場面において、「楽しむ」という文化的・社会的側面と「教える」といった生理的側面を両立させることの難しさが指摘されており、保育者は両者の間において葛藤があることが指摘されている。このことは、保育所の食事場面において、保育者と子どもの相互作用、特に、保育者から子どもへの作用（働きかけ）の質を担保することの難しさを示唆している。

２．研究の目的と方法

前章において、保育者と子どもの相互作用の質あるいはパフォーマンスの質は、「保育の質」の中心に位置付けられ、それらを向上させることは保育の質の向上に寄与すること、保育所の食事場面において、保育者から子どもへの作用（働きかけ）の質を担保することが難しく、保育者の専門性が問われる可能性を述べた。そこで研究課題として、保育所の食事場面における保育者の子どもへの作用（働きかけ）に焦点化して、どのような作用（働きかけ）が保育の質の向上に寄与するのであろうかという問題を考えたい。そのために、保育所の食事場面における保育者の子どもへの作用（働きかけ）にはどのような特徴があるか検討する。ここで、「働きかけ」といっても言葉かけのような言語的な方法や、身体的な行動を伴う非言語的な方法など様々にある。そこで、観察が比較的容易であり、「働きかけ」の中で最もよく観察されると思われる「言葉かけ」に着目した場合、保育所の食事場面における保育者の子どもへの言葉かけにはどのような特徴があるのだろうか。この研究課題を捉えようとする場合、言葉かけの背景にある「意図」と、言葉かけの対象となる子どもの「年齢」を考慮するべきであろう。以下、その理由を示す。

第１は「意図」である。言葉には、書き言葉や話し言葉など、複数の表現形式がある。本研究が対象とするのは「言葉かけ」であり、実際に発話される音声言語表現である。このとき、話者（保育者）の意図と発話の際に選択される音声言語表現には違いがある。例えば、「トマトを食べて欲しい」という意図をもって発話するとき、「トマトを食べようね」や「トマト美味しいよ」といったように、複数の音声言語表現がある。したがって、音声言語表現のみ分析しても保育者の子どもへの言葉かけを理解することはできないことから、意図も含めて分析する必要がある。

第２は「子どもの年齢」である。例えば、乳児と５歳児では獲得している言葉やコミュニケーションの能力に差があることは論を俟たないであろう。言葉かけの対象がどのような能力を獲得しているかによって、言葉かけの意図や方法は異なるはずである。したがって、保育者の子どもへの言葉かけの特徴は、子どもの年齢差も含めて分析する必要がある。

以上から、保育所の食事場面における保育者の子どもへの言葉かけの特徴を捉える場合、意図と子どもの年齢の２つの観点が必要であるといえる。しかしながら、保育所の食事場面における保育者の子どもへの言葉かけに関する先行研究（中澤・鍛治・石井，1995；今村，2008；伊藤，2013；伊藤・七木田，2014；今村・西岡，2015；伊藤，2020）では、意図と子どもの年齢を両方とも含めて詳細に分析した研究はない。すべての研究は３歳以上の子どもを対象としており、対０～２歳児に対する研究はない。また、中澤・鍛治・石井（1995）や伊藤（2013）では、意図について触れられているものの、どのような意図があり、言葉（音声言語表現）とどのような関係があるかといった分析がなく、意図を含めて言葉かけを分析したとは言い難い。

そこで、本研究の目的は、保育所の食事場面における保育者の子どもへの言葉かけを、意図と子どもの年齢を含めて分析し、その特徴を明らかにすることである。

次に、研究の方法について述べる。参与観察により、８つのエピソード記録を資料として分析した。時期は2019年５月から10月である。はじめに筆者（保育士歴４年）のこれまでの保育を振り返り、０・１歳児クラス、５歳児クラスのそれぞれについて、食事場面におけるエピソードを言葉かけと意図を含むように収集した。０・１歳クラスと５歳児クラスを分析の対象としたのは、子どもの年齢による言葉（音声言語表現）や意図の違いが明確になると考えたからである。次に、得られたエピソードから「言葉（音声言語表現）」と「意図」、さらに「意図」が生成される場としての文脈も抽出した。次に、「言葉（音声言語表現）」と「意図」のそれぞれに対してラベル化し、言葉と意図を上位概念で表現し、いくつかのカテゴリーにわけた。さらに、縦軸に意図のカテゴリー、横軸に言葉（音声言語表現）のカテゴリーをとりマトリックス表の作成、言葉や意図についての相対度数分布表とグラフを作成した。そのうえで、対象児の年齢差による言葉の違い、意図の違い、意図を含めた言葉の特徴について分析した。ここで、本研究では、保育者の０・１歳児に対する発話を「対０・１歳児発話」といい、５歳児に対する発話を「対５歳児発話」とよぶことにする。

３．結果

はじめに、食事場面における保育者と０・１歳児、保育者と５歳児のそれぞれについて、４つのエピソード（合計８例）を収集した。次に、得られたエピソードから言葉（音声言語表現）と意図を抽出し、文脈とあわせてコーディングし、「言葉」と「意図」のそれぞれでラベル化し、言葉と意図をいくつかのカテゴリーにわけた。その結果、「言葉（音声言語表現）」については12カテゴリーにわけられ、「意図」については９カテゴリーにわけられた（表１および表２）。なお、今村（2008）には、言葉（音声言語カテゴリー）の一つに「アニミズム」が含まれていた。本研究においてもアニミズムに該当する発話があったが、アニミズムは他の言葉（音声言語表現）に付随する形で出現することが多く、分析のしやすさを考慮して本研究では言葉のカテゴリー

の一つに含めないが､分析する際の参考にする。例えば、「ニンジンさん､食べようね」は「提案」と「アニミズム」の両方であると考えられる。しかしながら、一つの発話に対応する言葉（音声言語表現）は一つの方が分析がしやすいと考え、「提案」に属すると考える。しかしながら、「アニミズム」はまったく考慮しないわけではなく､「アニミズム」と同時に現れる言葉（音声言語表現）を分析する際に考慮することにする。

次に、表１の言葉（音声言語表現）の各カテゴリーで、対０・１歳児発話と対５歳児発話のそれぞれに対する度数分布表と誤差範囲付きの相対度数グラフをそれぞれ表３及び図１に示す。ここで、表３、表４に示すように、言葉かけの総数は 102 であり、その内訳は対０・１歳児 56、対５歳児 46 である。また、表３における括弧内は相対度数を示している。さらに、言葉（音声言語表現）の各カテゴリーの度数が子どもの年齢（０・１歳児と５歳児）と関係があるかχ^2検定を実施した結果、対５歳児発話の方が対０・１歳児発話よりも「応答」「教示・指導」が多く、対０・１歳児発話の方が対５歳児よりも「提案」「実況」が多いことが示された（$\chi^2(1, N=102)=3.841, p<.05$）。

また、表２の意図の各カテゴリーに対して、対０・１歳児発話と対５歳児発話のそれぞれに対する度数分布表と誤差範囲付きの相対度数グラフをそれぞれ表４及び図２に示す。さらに、意図の各カテゴリーの度数と子どもの年齢（０・１歳児と５歳児）の関係についてχ^2検定を実施した結果、対０・１歳児発話の方が対５歳児発話よりも「技能」が多く、有意水準５％で、対５歳児発話の方が対０・１歳児発話よりも「マナー・躾」が多いことが示された（$\chi^2(1, N=102)=3.841, p<.05$）。

表１　言葉（音声言語表現）のカテゴリー

応答	子どもが話しかけてきたことに対する発話
感想	保育者自身が思った事、感じた事
教示・指導	姿勢や礼儀、作法などのマナーについて注意する事
他者媒介	他者を通して保育者の思いや考えを伝える事
食べ方	咀嚼や嚥下を促す発話
提案	食べる意欲に繋げたり、摂食を促したりするための発話
問いかけ・呼びかけ	子どもの反応や様子を知るための発話
理解	子どもの気持ちを受け止めようとする発話
賞賛	子どもを褒め、認める発話
情報	食や食材に関することを教える発話
実況	食べ始めから食べ終わるまで実況中継をすること
アニミズム	すべての物に命があるように発話すること
その他	

表２　意図のカテゴリー

意欲喚起	食べる意欲を引き出したい/苦手なものも食べて欲しい/食べる意欲につなげたい
摂食促し	美味しく食べてほしい/楽しく食べてほしい/ゆっくり食べてほしい
技能	咀嚼を促したい/嚥下を促したい/口を大きく開けてほしい
受容・共感	様々な気持ちを受けとめたい/気持ちを共有したい/無理強いしたくない
興味・関心	苦手なものに興味を持ってほしい/食べることや食材に興味・関心を持ってほしい
観察・把握	気持ちが聞きたい/（表情から）気持ちを読み取りたい/反応が見たい
マナー・躾	マナーを教えたい/けじめをつけさせたい/きれいに食べてほしい
安全・環境	安全に食べてほしい/楽しい雰囲気を作りたい
知識	栄養について知ってほしい/食材について知ってほしい

さらに、保育所の食事場面における保育者から子どもに対する言葉（音声言語表現）のカテゴリーを横軸にとり、意図のカテゴリーを縦軸にとりマトリックス表を作成した（表５）。両年齢を統合した発話に対してχ^2検定を実施した結果、言葉（音声言語表現）と意図に有意な関係が認められた（$\chi^2(88, N=102)=253.915, p<.05$）。さらに、残差分析を行ったところ、「安全・環境」を意図したときの「実況」の言葉かけ、「意欲喚起」を意図したときの「感想」および「実況」の言葉かけ、「観察・把握」を意図したときの「問いかけ・呼びかけ」の言葉かけ、「技能」を意図したときの「食べ方」の言葉かけ､「受容･共感」を意図したときの「理解」の言葉かけ、「知識」および「マナー・躾」を意図したときの「教示・指導」の言葉かけが多かった。また、「摂食促し」を意図したときの「教示･指導」の言葉かけは少なく､「情報」および「他者媒介」の言葉かけは多かった。

表３　言葉（音声言語表現）の年齢別度数（括弧内は%）

分類項目	0・1歳	5歳	合計
応答	2(3.57)	8(17.78)	10(9.90)
感想	4(7.41)	2(4.44)	6(5.94)
教示・指導	1(2.00)	16(33.33)	17(15.84)
他者媒介	4(8.16)	0(0.00)	4(3.96)
食べ方	10(22.22)	4(8.89)	14(13.86)
提案	9(16.07)	1(2.22)	10(9.90)
問いかけ・呼びかけ	12(21.43)	4(8.89)	16(15.84)
理解	4(7.14)	5(11.11)	9(8.91)
賞賛	2(3.57)	2(4.44)	4(3.96)
情報	2(3.57)	3(6.67)	5(4.95)
実況	5(8.93)	0(0.00)	5(4.95)
その他	1(1.79)	1(2.22)	2(1.98)
合計	56(100.00)	46(100.00)	102(100.00)

図１　言葉（音声言語表現）の相対度数グラフ

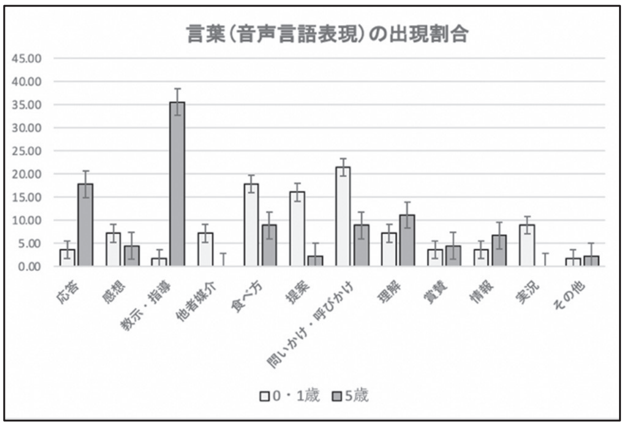
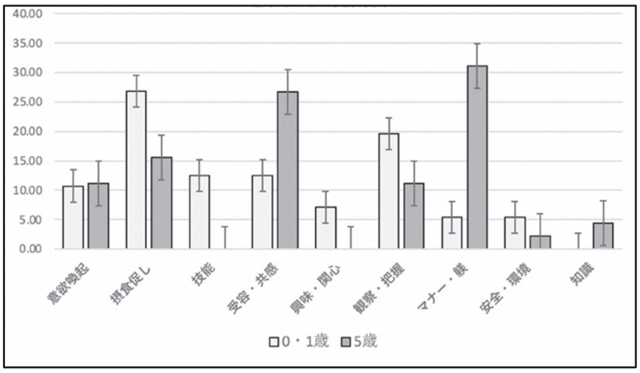


表４　意図の年齢別度数（括弧内は%）

分類項目	0・1歳	5歳	合計
意欲喚起	6(10.71)	5(11.11)	11(10.89)
摂食促し	15(26.79)	7(15.56)	22(21.78)
技能	7(12.50)	0(0.00)	7(6.93)
受容・共感	7(12.50)	12(26.67)	19(18.81)
興味・関心	4(7.14)	0(0.00)	4(3.96)
観察・把握	11(19.64)	5(11.11)	16(15.84)
マナー・躾	3(5.36)	14(28.89)	17(15.84)
安全・環境	3(5.36)	1(2.22)	4(3.96)
知識	0(0.00)	2(4.44)	2(1.98)
合計	56(100.00)	46(100.00)	102(100.00)

図２　意図の相対度数グラフ



４．考察

（１）言葉かけにおける「言葉（音声言語表現）」の年齢による違い

① 対５歳児発話の方が対０・１歳児発話よりも「応答」「教示・指導」が多かったことについて

まず「応答」が多かった理由について考察する。５歳児は０・１歳児に比べると言葉を多く獲得し、様々な自己表現ができるようになる。そのため、保育者や友達と言葉でコミュニケーションをとろうとする。保育者は、食事中に子供からかけられる多くの発話に対し、応答することでコミュニケーションを取るため、「応答」に関する言葉かけが多いと考えられる。

次に「教示･指導」が多かった理由について考察する。給食は共食の機会であり、コミュニケーションやマナー等の社会性を育てる大切な機会であるといえる。一般に２歳頃に自我が芽生え、５歳から６歳になると自我はより強くなるといわれている（帆足ら，2014，p.54）。この時期の子供に対して、保育者は自己有能感を高めるような言葉かけを通して社会の一員としての行動を教える必要があるため、「教示・指導」に関する言葉かけが多いと考えられる。

② 対０・１歳児発話の方が対５歳児よりも「提案」「実況」が多かったことについて

まず「提案」が多かった理由について考察する。０・１歳児は５歳児に比べると初めて食べるものが多い。そ

表５　保育者から子どもに対する言葉かけにおける言葉（音声言語表現）と意図
（上段・中段・下段はそれぞれ「対０・１歳児」「対５歳児」と合計を表す。括弧内は割合（%）を表す）

		言葉（音声言語表現）												
		応答	感想	教示・指導	他者媒介	食べ方	提案	問いかけ 呼び掛け	理解	賛賞	情報	実況	その他	合計
意図	意欲喚起	0(0.00) 2(4.44) 2(1.98)	1(1.79) 2(4.44) 3(2.97)			1(1.79) 0(0.00) 1(0.99)	1(1.79) 0(0.00) 1(0.99)				1(1.79) 0(0.00) 1(0.99)	2(3.57) 0(0.00) 2(1.98)	0(0.00) 1(2.22) 1(0.99)	6(10.71) 5(11.11) 11(10.78)
	摂食促し	1(1.79) 0(0.00) 1(0.99)	1(1.79) 0(0.00) 1(0.99)		4(7.14) 0(0.00) 4(3.96)	2(3.57) 3(6.67) 5(4.95)	3(5.36) 0(0.00) 3(2.97)	1(1.79) 0(0.00) 1(0.99)	0(0.00) 1(2.22) 1(0.99)	2(3.57) 0(0.00) 2(1.98)	0(0.00) 3(5.88) 3(2.97)		1(1.79) 0(0.00) 1(0.99)	15(26.79) 7(13.33) 22(21.56)
	技能					6(10.71) 0(0.00) 6(5.94)	1(1.79) 0(0.00) 1(0.99)							7(12.50) 0(0.00) 7(6.86)
	受容・共感	1(1.79) 3(6.67) 4(3.96)		0(0.00) 2(4.44) 2(1.98)			0(0.00) 1(2.22) 1(0.99)	2(3.57) 1(2.22) 3(2.97)	4(7.14) 3(6.67) 7(6.93)	0(0.00) 2(4.44) 2(1.98)				7(12.50) 12(26.67) 19(18.63)
	興味・関心		2(3.57) 0(0.00) 2(1.98)				1(1.79) 0(0.00) 1(0.99)				1(1.79) 0(0.00) 1(0.99)			4(7.14) 0(0.00) 4(3.92)
	観察・把握	0(0.00) 3(6.67) 3(2.97)					2(3.57) 0(0.00) 2(1.98)	9(16.07) 1(2.22) 10(9.90)	0(0.00) 1(2.22) 1(0.99)					11(19.64) 5(11.11) 16(15.68)
	躾・マナー			1(1.79) 11(24.44) 12(11.88)		1(1.79) 1(2.22) 2(1.98)	1(1.79) 0(0.00) 1(0.99)	0(0.00) 2(4.44) 2(1.98)						3(5.36) 14(31.11) 17(16.67)
	安全・環境			0(0.00) 1(2.22) 1(0.99)								3(5.36) 0(0.00) 3(2.97)		3(5.36) 1(2.22) 4(3.92)
	知識			0(0.00) 2(4.44) 2(1.98)										0(0.00) 2(4.44) 2(1.96)
	合計	2(3.57) 8(17.78) 10(9.90)	4(7.14) 2(4.44) 6(5.94)	1(1.79) 16(35.56) 17(16.83)	4(7.14) 0(0.00) 4(3.96)	10(17.86) 4(8.89) 14(13.86)	9(16.07) 1(2.22) 10(9.90)	12(21.43) 4(8.89) 16(15.84)	4(7.14) 5(11.11) 9(8.91)	2(3.57) 2(4.44) 4(3.96)	2(3.57) 3(5.88) 5(4.95)	5(8.93) 0(0.00) 5(4.95)	1(1.79) 1(2.22) 2(1.98)	56(100) 46(100) 102(100)

のため、初めての食べ物に対して嫌悪感を示す食物新奇性恐怖（ネオフォビア）が見られる。一方、食べ慣れたものでも摂取した後に嘔吐や体調不良を起こした場合、その後同じ食べ物を見ると同じ気持ちになり、その食べ物に拒否反応を示すという味覚嫌悪学習をしてしまう。これらの理由により、０・１歳児は食べる意欲をなくしてしまう可能性があるため育者は食べる意欲を引き出すような提案をしていたと考えられる。また、０・１歳児は探索行動といわれる遊び食いやむら食いが多い。そのため、こぼす量が増え、実際の摂取量が減少する。摂食量の減少は、栄養の偏りや栄養不足に繋がる恐れがあることから、保育者は、探索行動をおこないがちな０・１歳児に対して、食べられる量や食べやすい大きさなどを提案しながら子供の食べる意欲を喚起させるようにしていたと考えられる。

次に「実況」が多かった理由について考察する。０・１歳児は味覚を育てる大切な時期であるが、味覚が未発達な０・１歳児でも食べ物に対する好き嫌いはある。嫌いなものがあると偏食に繋がる恐れがあることから、子供が嫌いなものでも食べられるように保育者は支援する必要がある。例えば、「〇ちゃんのお口にもお魚さんが入りますよー」などといった実況により、楽しい雰囲気の中、様々な食材や食感を繰り返し経験させることで、子供の味覚の発達を促し、嫌いなものでも少しずつ食べられるようになると考えられる。

（２）言葉かけにおける「意図」の子どもの年齢による違い

① 意図について対０・１歳児発話の方が対５歳児発話よりも「技能」が多かったことについて

対０・１歳児発話が対５歳児発話より「技能」に関する意図が多かった理由として三つ考えられる。

第一に、０・１歳児は保育者からの言葉かけがなければ、自分から口を開けること、咀嚼すること、飲み込むことができない。したがって、保育者は、口を大きく開けてほしい、咀嚼や嚥下を促したいという意図が多いと考えられる。

第二に、５歳児は食具が使えるようになっているのに対して、０・１歳児は教えなければ使えるようにはならない。したがって、０・１歳児は５歳児よりも食具の使い方に関する意図が多くなると考えられる。しかしながら、このような技術面の指導は、各家庭の食育に対する考え方の違い、子ども自身の発達の程度の差があるため、保育者は子どもにより働きかけを変える必要がある。食具の使い方の指導は、保育者によって言葉かけの表現や意図が多様であると考えられる。

第三に、０・１歳児は５歳児に比べて摂食機能発達の差が顕著に表れる。例えば、歯の萌出の遅れにより咀嚼力や咬合力が弱い、生まれつき唾液が少ないため水分がないと食べ物を飲み込めないなど、同じ月齢の子どもと同じように食べられない子どもがいる。また、家庭での介助頻度が多いことにより、子どもが自発的に食べようとしないため、一口で食べられる量や噛み砕ける固さが分からないことから窒息に繋がる可能性もある。保育者は一人ひとりの発達に合わせ、食材を細かくしたり汁物を混ぜたりして、子どもが食べやすくする工夫をする必要がある。

以上の考察により、対０・１歳児発話は対５歳児発話より「技能」に関する意図が多かったと考えられる。

② 意図について、対５歳児発話の方が対0･1歳児発話よりも「マナー・躾」が多かったことについて

近年共働き世帯、核家族、ひとり親の世帯数が増加するなど、子どもを取り巻く環境が多様になり、子どもが一人で食事する（孤食）が増えている（2019 保育白書，p.11；飯塚ら,2015，p.5；永田,2018，pp.92-93）。しかしながら、孤食は食欲低下等の問題点があり、共食の機会を増やすことが食欲を促進させるだけではなく、社会性を育てるうえで大切であるといわれている（飯塚ら,2015，p.5）。給食は共食の機会であり、したがって、コミュニケーションやマナー等の社会性を育てる機会であるといえる。しかしながら、０・１歳児は社会性以前にある自ら食具を用いて食事することなどが未発達である。一方、５歳児は０・１歳児と違い、自ら食具を用いて食事をすることなどができ、社会の一員としての行動を育てる時期である（帆足ら,2014，p.68）。したがって、対５歳児発話は対０・１歳児発話より「マナー・躾」に関する意図が多かったと考えられる。

③ 意図と言葉（音声言語表現）の関係について

まず、「マナー・躾」を意図したときの「教示・指導」の言葉かけが多かった。これは、保育者が子どもに対して集団の中における行動規範を意図したものを個別の子どもに対してのみでなく、クラス全体で共有できるように言葉かけしている。個別の子どもの問題をクラス全体の問題として共有できるように言葉（音声言語表現）を選択することは、集団食事場面の特質を利用しているといえる。また，「摂食促し」を意図したときの「他者媒介」の言葉かけは多かった。これは、摂食を促す意図を、他の子どもが食べていることを引き合いに出すことにより伝えようとするものであり、集団食事場面の特質を利用しているといえる。

一方、「意欲喚起」を意図したときの「感想」および「実況」の言葉かけ、「観察･把握」を意図したときの「問いかけ」の言葉かけ、「技能」を意図したときの「食べ方」の言葉かけ、「受容・共感」を意図したときの「理解」の言葉かけが多かった。「意欲喚起」「観察･把握」「技能」「受容・共感」は保育者が個別の子どもに対する意図であるが、「マナー・躾」のようにクラス全体で共有しようとせずに、「感想」「実況」「問いかけ」「食べ方」「理解」のように個別の子どもに対する言葉（音声言語表現）を使っている。

以上のことから、保育所の食事場面における保育者の子どもへの言葉かけは、保育者の意図に応じて、個

別の言葉かけ、集団食事場面の特質を利用した言葉かけを使い分けていることが明らかになった。

５．結論

本研究の目的は、保育所の食事場面における保育者の子どもへの言葉かけを、意図と子どもの年齢を含めて分析し、その特徴を明らかにすることであった。その結論として、保育者の子どもへの言葉かけにおいて、子どもの年齢に応じて意図と言葉（音声言語表現）が異なっていることが明らかとなった。さらに，保育者は意図に応じて、個別の言葉かけ、集団食事場面の特質を利用した言葉かけを使い分けていることが明らかになった。

６．今後の課題

本論は限られたデータでの分析結果であり、今後は、保育者へのインタビューを行い考察したい。

【引用文献】

秋田喜代美．国際的に高まる『保育の質』への関心 ―長期的な縦断的研究の成果を背景に，『BERD』，16，ベネッセ教育総合研究所，13-17，2009.

秋田喜代美．保育の質とは何か，『発達科学ハンドブック６―発達と支援』，日本発達心理学会編（無藤隆・長崎勤　責任編集，新曜社，2012.

帆足英一ら．文部科学省検定済教科書 高等学校家庭科用 子供の発達と保育，実教出版，2014.

飯塚美和子ら．最新 子供の食と栄養，学建書院，2015.

今村光章．給食時における幼稚園教諭の発話分析 ―幼児期における「既存型」の食育の枠組みの解明を目指して―．岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究，10，125-134，2008.

今村光章・西岡さゆり．給食時における幼稚園教諭と小学校教諭の発話分析とその比較―「既存型食育」の枠組みの解明を目指して―．岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究，17，81-89，2015.

伊藤優．保育所の食事場面における保育士の働きかけの特質．保育学研究，51(2)，211-222，2013.

伊藤優・七木田敦．経験年数による食事場面における保育者の食事指導意識の差異，小児保健研究，73(1)，21-27，2014.

伊藤優．幼児の食行動別にみた保育者の食事指導意識，日本家政学会誌，71(7)，445-455，2020.

中澤潤・鍛治礼子・石井恭子．幼稚園教師の食事場面における援助の分析―子どもの発達と教師の保育観，保育学研究，33(1)，59-67，1995.

野澤祥子．保育の質とその確保・向上のために．文部科学省．保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会（第一回）配布資料，2018.

OECD（星ら訳）．OECD 保育白書　人生のはじまりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア（ECEC）の国際比較，明石書店，2011.（原書：Starting Strong Ⅱ early childhood education and care, 2006）

全国保育団体連絡会・保育研究所．『2019 保育白書』．ひとなる書房，2019.